



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

私のお父さんは 何処？

何百万もの胎児が殺されてきました。子宮が墓場と化しています。しかも彼らの本当の父親が脇へ寄り、彼らを殺すことを許しているのです。日々、世界中で女の人たちが自分たちの子供を墮ろしています。それを社会は正しいことであると言ひ、子宮の中で孤独に発育してゆく幼い命を絶つことが普通であり、倫理的であると言っています。恐らく胎児たちは今、「私のお父さんは何処？」と叫んでいるのでしょう。彼らの叫びが集まって、段々轟き渡る程の強さになっています。その叫びを聞き留めなくてはいけないのは彼らの本当の父親なのです。しかしながら、「生命の擁護者」としての父親の基礎的な定義を男の人たちは否定し

てきました。父親を知らない子供たちを守る、という神から与えられた責務に背く政治家や説教者があり、彼らは「選択の自由」「フェミニズムの承認と祝福をすすめました。

今日の男性たちは胎児たちが守られずにいることを確かに放つておいたのです。そしてその男たちが父親を持たない子供たちに背を向けることによつて、社会が完全に無防備でむき出しのまま放置されてしまっているのです。このことによつて、若者に対する、若者による激しい暴力が起ることに目に見えてわかるのです。

中絶されたものたちの血に責任を持つべき者は第一にその父親なのであります。そして正義のもと、彼らが一番最初に裁きの場に立つのです。そして神は彼らの犯した私通や不義に対してだけでなく、彼らの宿した命を子宮の中で滅ぼしたことに對しても弁明を強く求めるでしょう。

自分の責務を無視した男は天の父に卑下して、後悔の懺悔をするべきなのです。男は、夫として、父親として家族の支えになり、優れた男性になれる事を願ひ、祈るべきなのです。

しばらく前に、カンペラでオーストラリア連邦議会のメンバーのグループに演説をする機会がありました。その後、その中の一人の男の方が私の所へ来て自己紹介をしてくれました。しばらくの間雑談や冗談を交わした後、その人は名刺を置いて帰つ

ていきました。名刺の左上の角にオーストラリアの紋章が浮き出し印刷されていました。その紋章については、前に読んだことがありましたが、見るのはその時が初めてでした。オーストラリアのモットーは「アドバンス・オーストラリア」で、紋章にはエミューとカンガルーが浮き出されています。私の知るところは、エミューやカンガルーはオーストラリアだけの動物というわけではありませんが、互いに同じ特徴を持っていません。その特徴とは、両方も後ずさりしないと云うことです。前進しかないのです。

私はこの、前進せよ。という紋章のメッセージに感動しました。我々が神の望むような男になれるように前進しようではありませんか。父親を知らない者たちの叫びを聞き留め、彼らを守るために固い決

てきました。父親を知らない子供たちを守る、という神から与えられた責務に背く政治家や説教者があり、彼らは「選択の自由」「フェミニズムの承認と祝福をすすめました。

今日の男性たちは胎児たちが守られずにいることを確かに放つておいたのです。そしてその男たちが父親を持たない子供たちに背を向けることによつて、社会が完全に無防備でむき出しのまま放置されてしまっているのです。このことによつて、若者に対する、若者による激しい暴力が起ることに目に見えてわかるのです。

中絶されたものたちの血に責任を持つべき者は第一にその父親なのであります。そして正義のもと、彼らが一番最初に裁きの場に立つのです。そして神は彼らの犯した私通や不義に対してだけでなく、彼らの宿した命を子宮の中で滅ぼしたことに對しても弁明を強く求めるでしょう。

自分の責務を無視した男は天の父に卑下して、後悔の懺悔をするべきなのです。男は、夫として、父親として家族の支えになり、優れた男性になれる事を願ひ、祈るべきなのです。

意を持って前進しようではありませんか。そして、自分たちの家族の支えとなり、我々の社会と国家の中軸となるのではありませんか。祈りの人になろうではありませんか。家庭や国家を破壊しているポルノ作家や墮胎施術者と向かい合って、ひるむことなく、断固として前進して行くのではありませんか。

ジョン・O・
アUNDERソン師

スコット坊や

本当に美しい子ども

友人の子どもスコット君に異常がある事は産まれる前から既に分かっていた。母親が七ヶ月検診で、子宮が異常に肥大している

と診断されました。その後、超音波で調べたところ、赤ちゃんの頭よりも腹部

部が大きい事が分かりました。これによってどんな障害が起こるのか。どのくらいひどいのか。想像しようにも見当が付きませんでした。

主人は会計士をしていて、顧客の中にはプロの運動選手もいました。そのついで、時々「美しい人間」の会合に出席して

いました。女性美しく、流石の服装に身を包んでいきます。皆財産も地位もある人ばかりです。

この会合に行くたびに、私は自分に自信を無くしてしまふ。長年のリュウマチ関節炎のせい自由のきかない手や、なんとも接合手術による傷痕をつくづく眺めずにはられない。歩く時はびっこにならない。細かい注意を払

い、心の中でこうつぶやいている。「私だけが違う。私は美しい人間じゃないんだ」と。

スコット坊やの発育異常の事を初めて聞いたとき、我々の住む「美しい人間」主導型社会に神が幼き使者を送って下さったのではないか、そんな気がした。彼の母親が大病院の分娩室に入っている間、私も外で誕生を待ちました。ここでなら産まれてすぐ集中治療室で細心の技術が受けられる。自分もその瞬間に立ち会いたいと思つた。ようやく父親が分娩室から出てきた。ほっとしたうれしそうな表情だ。「全て順調で、息子も元気です。よかつたら集中治療室に入る前に会ってやってくれませんか。」

彼の入っている小さな保育器に案内された。とても愛らしくお母さんにそっくりだ。手術後、「近親者」という形で特別に集中治療室にいられてもらった。たくさんの管や針を通して、モニターにつながれたスコットが痛々しい。

できるものなら抱きしめてやりたい。思わず涙がこぼれた。手術の結果は良好で、障害も克服できたかと希望が見えてきた。ところが今度は膀胱に障害がある事が判明し、又一からやり直しとなってしまう。数カ月が過ぎ、私の病院までの長い散歩もすっかり日課となった頃、ようやくスコットを抱く事が出来るようになりました。でも、小さな体のすみずみに通された管に注意しながらそつと。彼の消化機能は全く機能していない。

それが出来たおかげで、スコットは産まれて初めて自分の家に帰れる事になった。自宅でも看護婦による介護は継続されるが、とにかく家に帰れる！パパ、ママ、お兄ちゃんと一緒に改装したての部屋で暮らせるのだ。この日をどうんなに待っていた事か。父母はようやく自分の手で

た。彼の母親が大病院の分娩室に入っている間、私も外で誕生を待ちました。ここでなら産まれてすぐ集中治療室で細心の技術が受けられる。自分もその瞬間に立ち会いたいと思つた。ようやく父親が分娩室から出てきた。ほっとしたうれしそうな表情だ。「全て順調で、息子も元気です。よかつたら集中治療室に入る前に会ってやってくれませんか。」

彼の入っている小さな保育器に案内された。とても愛らしくお母さんにそっくりだ。手術後、「近親者」という形で特別に集中治療室にいられてもらった。たくさんの管や針を通して、モニターにつながれたスコットが痛々しい。できるものなら抱きしめてやりたい。思わず涙がこぼれた。手術の結果は良好で、障害も克服できたかと希望が見えてきた。ところが今度は膀胱に障害がある事が判明し、又一からやり直しとなってしまう。数カ月が過ぎ、私の病院までの長い散歩もすっかり日課となった頃、ようやくスコットを抱く事が出来るようになりました。でも、小さな体のすみずみに通された管に注意しながらそつと。彼の消化機能は全く機能していない。

息子を育てる事が出来る。兄のマチユーもやっと弟と遊べる。スコットは笑ったりおもちゃを手ににはしゃいだり、楽しそうにすくすく成長した。4週間は夢のように過ぎて行った。ところが、又異常が見つかった。慌てて病院につれていくと、薬の影響で肝臓が機能しなくなっていると言ふ。肝臓移植が必要となった。笑い声が途絶え、また悲しみがやってきた。スコットもかなり具合が悪いらしい。顔色もくすんだ黄色がかっている。肝臓病を併発しているサインは小さな体のあちこちに見られた。ある日私は、献血してくれる友人を集め、病院へ連れて行った。献血の間、スコットを抱く事が出来たが、それが最後となったってしまった。もう笑顔は見られず、あんなに輝いていた瞳も、痛みのせいでどんより曇っている。桃色のほつぺたも、今は黄緑色

に変わっていた。ぎゅっと彼を抱きしめ、ゆりかごのように揺すってあげた。涙が止まらなかった。二日後、スコットのお母さんから、肝臓が手に入ったので今晚手術します」と連絡があった。主人と私は車で駆けつけ、待機しました。深夜0時、1時：まだ終わらない。廊下を歩き回りながらも言葉少なに、ひたすら祈り続けた。その後、いったん家に戻る事にした。七時に電話がなった。手術は不成功で、スコットは後2時間しか生きられないと言ふ。急いで病院へ向かった。両親が息子にお別れをいい、息子は静かに、そして穏やかに彼らの元を離れ、救いの神の元へ旅立っていく。そんな聖なる瞬間に立ち会う事が出来た。

銘を受けた人々は多い。もしスコットが完全な子供だけを望む夫婦のもとに生まれていたら、おそらくこの世に誕生しえなかつただろう。だがこの子は本当に短い生涯の中で、「美しい人間」が一生かかって出来ないほど、身を持って神の素晴らしさを教えてくれた。彼の一生は、確かに短く苦しかった。だがその苦しみは天にまします神の愛のもとに与えられたものだ。中絶手術で冷たく鋭いメスに切り刻まれる痛みとは違う。美しい人間に属さない生命を中絶によって断つてしまうなんて、それによる損失は計り知れないのに。しかし現代人の心理や行動を見ていて、声なき胎児の存在に気づかせる必要があると強く感じた。

子供に欠陥や異常がある場合は、中絶した方がその子にとっても幸せかも知れない。そう考えている人はちょっと待って欲しい。神はその子を素晴らしく、恐ろしく、美しくお創りになった(詩編百二十九：13-16)神自身がその子供をその様に計画したのだ(出エジプト記4：11)。神がその子供を通して教えようとしている教訓、愛、救いを取り除き、世の中を不毛にしてしまうなど、どうして出来るだろう。私は、スコットは神からの贈り物だったと信じている。体の痛みがひどい時や手術を受ける前など、彼の事を思い出すと勇気がわいてくるのだ。

J・コールジャン

貞潔に関する価値

人間 人間が一番大切。人間は愛されるべきで、利用されるべきではない。

愛 愛は生活の中心である。愛には次の3種類がある。

アガペー愛=神の愛(自己犠牲的・非計算的な愛)

エロス愛=性的な愛(私が欲しいという自己中心的な愛)

フィレオ愛=友情の愛

性 男と女は互いに補足しあって完全なものとなるように作られた。

快樂 快樂はよい事だが、時には即座の満足を先に延ばして、より大きな喜びとなるようにしなければならぬ。

鍛練 成熟するためには
自己鍛練と自制が必要
である。

忠誠 永久の忠誠は最も
理想的であり、大きな価
値がある。誰もが「永遠
の愛」を夢見る。

子育て 子どもが十分に
成長するために大人は
世話をしなければなら
ない。

自然 自然と調和して生
きていくのはなかなか
難しい。

責任 私たちは社会的な
生き物である。お互いに
影響を及ぼす。自分達の
行動の結果には責任が
ある。

成長 生きている事は成
長している事だ。

中絶

ある少女の後悔

その少女は苦痛の中に
生きていた。両親がアル中
だったその少女は普通の
十代の少女たちよりも
ずっと早く成長せざるを
得なかった。彼女は当時の
ことを、私の方が親みたい
なもので、まるで子供のよ
うな両親を私が面倒をみ
なければならぬといっ
た感じだった。」と言った。ま
だ幼かった彼女は、特に父
親の気を引くことに懸命
だった。なんとか両親を喜
ばせたいと必死だった。二
人に自分のことを認めて
もらいたかった。

よらないことが起こった。
妊娠である。「初めはそん
なこと絶対にありえない
と思っていた。」でも検査
を受けると、妊娠だった。
彼女はとても困惑した。
ボーイフレンドは慌てて、
中絶をすすめた。でも彼女
は生みたかった。赤ちゃん
の父親を心から愛してい
たし、中絶をしてしまった
ら二人の間にある大切な
ものまでも壊してしまう
ような気がした。妊娠した
ことを両親にも話してお
きたいと思ったが、二人の
反応を考えると恐くてで
きなかつた。ボーイフレ
ンドにも親には話すなど強
く念を押された。

彼女が一人で寂しく過ご
すことが非常に多く、ずつ
と、普通の家庭を持つこと
がどんなものかをいつも
考えていた。早く私に合っ
たボーイフレンドが現れ
るようにと待ち焦がれて

カ月後二人は別れてし
まった。
その苦しみから逃れよ
うと、彼女はとうとう薬と
酒に頼るようになった。母
親は様子がおかしいこと
を心配し、何があつたかを
聞いてみた。少女は初めて
自分が中絶したことを話
した。母親はショックを受
け、怒りだした。

15歳の時、彼女はピッタ
リのボーイフレンドにめ
ぐり合った。お互いに一目
惚れで、二人はすぐに肉体
関係まで持つようになった。
た。彼女は、生まれて初め
て人から必要とされ、愛さ
れるという気持ちを味
わった。

それでも心の奥底では
自分が何か悪いことをし
ているのではないかとい
う不安に駆られていた。
「とても不潔で恥ずかしい
ような気持ちだった。私が
していることを友達には
絶対知られたくなかつ
た。」という。しばらくの
間は何もかもうまくいっ
ていた。が、突然、思いも

ある朝目が覚めると、彼
女は中絶をしたいと思っ
た。すぐに病院に電話をす

ある朝目が覚めると、彼
女は中絶をしたいと思っ
た。すぐに病院に電話をす

るとキャンセルが出たため3時間後に予約を取る事ができた。問題は、今回の妊娠を母親が知っていることだった。

母親は自分の娘に嫌気がさした。「なんてバカなことをしてくれたんだ。」というのが母親の反応だった。だが、中絶ということばは最後まで出なかつた。子供を生むものと信じて疑わなかつた母親は、娘の妊娠に直面した父親をどう扱ったらいいかを娘と話し合った。しかし彼女の決心は固く、母親の目を盗んで中絶をした。そして母親には流産してしまつたと言つた。16歳の時の出来事だった。

彼女は自分の今までしてきたことを認め、他人を許すことができ、これからの人生を強く歩んでいく自信が持てるまでになった。

過去を振り返る時、「苦しみ半分は、自分が妊娠したことを親に話すこと軽蔑されるのではないかと、この恐怖からくるものだった。その恐怖が二人の子供の生命を犠牲にしてしまつた。もつと選択の余地はあつたはずなのに。親に話すのが恐ければ手紙を書くとか、電話で打ち明けるとか、友達と一緒にいってもらつとか、方法はいくつでも考えられたはずだ。」と彼女は思う。

中絶後の数年間は鬱病

と自己嫌悪に悩まされた。

しかし、そんな中で彼女は、イエス・キリストと出会ふことによつて人を許すことを学んでいった。そして彼女の人生も少しずつ変わつていった。ついに

PLAM mpis

結末

勝利への鍵

プロ・ライフ・ムーブメントは今日、一つの差し迫つた問題に直面していません。それは意識の統一性の欠如です。

どのような運動においても、意見の不一致は常にあるもので、この点プロ・ライフ・ムーブメントも同様です。

意識の統一は、一連の主義の中に共通する信念から起こるものです。プロ・ライフ・ムーブメントも、勝利が個人や一団体の努力によつて得られるのではなく、すべての人間の生命は受精の瞬間に始まり自然死の瞬間まで続くという生命尊重の原理における共通の信念によつて、はじめて得られるものであるという認識をする必要があります。プロ・ライフのメンバーは、私たちを

つなぐこの原則に注目しなければなりません。そして私たちは常に真実を語らなくてはなりません。というのも、まさにこの真実の中に、生命への絶対的尊重へと立ちかえらせる結束への精神が見い出されるからです。真実こそ、結束に欠かすことのできない前提となるものです。

もしプロ・ライフ・ムーブメントが日本人の心や考え方に訴えようとするのであれば、私たちの運動は根本的な正義を問題にするはずであつて、決して単なる利己的な、あるいはその場限りの関心を問題にはしないはずです。従つて、その指導者はこの原理に徹しなければなりません。

もし私たちが皆共に立ち上がり、この絶対真理に對して声を大にして、年齢、心身の健康、そしてどのような信頼状況にもかかわらず受精の瞬間から

人となるのだということに訴えるなら、私たちの声は大きく鮮明になり、結束はいとも簡単になされ、私たちすべてが熱望する究極的勝利が得られることとなるでしょう。

この原理がなければ、私たちは不和、分裂を起し、現実主義に振り回され、子供たちの死を待つばかりとなつてしまいます。

Issues 190